



Title	ダニール・アンドレーエフにおける輪廻転生
Author(s)	武藤, 洋二
Citation	大阪外国語大学論集. 1995, 13, p. 83-96
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/79674
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ダニール・アンドレーエフにおける輪廻転生

武 藤 洋 二

САНСАРА У ДАНИИЛА АНДРЕЕВА

МУТО Ёдзи

Содержание

1. “Творческое горение”
2. “Лабильная психика”
3. “Вольный пленник своей судьбы”
4. “Мессия”

Примечания

1. 「創造的燃焼」

詩人ダニール・アンドレーエフ（1906–1959）は、一行の詩も発表しないで死んだ。検閲が阻止したのではない。彼は、検閲も思想統制も宗教弾圧もやりすごすようにして生きた。印字製作として生計をたてながら、自分の作品を活字にしなかったのは、国家が許すようなものを書くのが自分の人生にとって無意味であると若い時から考えていたからである。

アンドレーエフは、スターリン体制下で暮らしながら、天上の住人が地獄を見おろすように、「國家権力の悪魔」が支配する修羅場を自己の宇宙論の高みから透視したのである。彼は、自分がきずきあげた思想的、宗教的、詩的世界に没入して、一語も発表するつもりのない文を書き続けた。検閲を通して不可欠な自己への裏切りが不必要になる。この自由のなかで、そしてまた栄誉や名声や収入への欲望からも自由になることによって、この天性の詩人は、天職を守った。世間は、印字製作でつましく暮らしている病弱な男が、特異な作品群を後世に残すことになる哲学詩人であることを知らなかった。

アンドレーエフは、独ソ戦では、身体が弱いので正規の兵士になれず、非戦闘員として死体を埋

葬する仕事などを行った。彼は、1937年から長編小説『夜の放浪者たち』を書いている。その原稿は、土の中に埋められている。戦争の最後の年に原稿を掘りだしてみると、湿気のため字は全て消えていた。彼は、それを再び始めから書きだす。「大祖国戦争傷病兵」と認定された、心臓を病む体でひたすら書き続け、1947年に『夜の放浪者たち』を完成させた。

作者は、これを信用できる親しい者たちに朗読した。信用のできるとは、政治警察に密告しないだろうという信頼のことである。このあと、アンドレーエフはハリコフで講演してほしいという依頼をうけた。むかえの車で空港にむかう途中でアンドレーエフは、逮捕された。講演は、ひそかに逮捕するための仕掛けである。1947年4月21日のことである。無事にハリコフに着いたという偽電報を受けとった妻は、2日後に逮捕され、『夜の放浪者たち』と家にあった全ての原稿が没収された。

『夜の放浪者たち』の朗読を聴いた者のなかから密告者がでたのである。当局は、家宅捜査の時に、最初から『夜の放浪者たち』をさがしていた。朗読の場にいた者たちも一斉に逮捕された。

取調べは、1年7カ月も続く。『夜の放浪者たち』の登場人物の一人が、スターリン暗殺計画をあたためていた。作品に書かれていることが、現実としてあつかわれ、登場人物たちが実在の誰れにあたるのかが追及された。

作者アンドレーエフは、この作中人物の企ての責任をとらされる。彼には、スターリン暗殺を準備したとして、25年の懲役が宣告された。妻アーラ・アレクサンドロヴナおよび朗読を聴いた血縁者、友人は、主犯アンドレーエフの帮助者として、重罪犯用の収容所で25年の労役に、その他の者は、10年の労役に服することになった。ちょうどこの頃2年半のあいだ死刑が廃止されていたので、死刑にかわる極刑は、25年の刑であった。

スターリン体制下では政治警察が犯罪の脚本を書き、その架空の配役表に従って現実の人間を逮捕した。脚本群にはスターリン暗殺計画もひんぱんに登場した。アンドレーエフは、スターリン暗殺計画の入った作品を自から書いている。拷問によって脚本の筋がきどおりに自白させたのではなく、逮捕以前に本人が自発的に書いているから、政治警察にとっては、原稿は正真正銘の物的証拠である。あるいは、そのようにあつかう職務上の義務がある。スターリン体制下では、このような非論理、超論理の次元で実際に事がはこばれる。

10年間の執筆の成果は、作者をとらえる罠となった。アンドレーエフの天職の一部は、国家権力によって凶器に変えられた。

“スターリン暗殺未遂犯”ダニール・アンドレーエフは、今まで書きためた全てを奪われることになる。刑の確定後、『夜の放浪者たち』をふくむ原稿、記録、文書はことごとく焼却処分された。その中には父親レオニードからの手紙もふくまれている。

レオニード・アンドレーエフ(1871-1919)は、銀の時代の代表的な作家であった。彼は、十月革命を、ボリシェヴィキーを憎悪した。1918年4月29日、6カ月間のボリシェヴィキー支配の結果を彼は日記にしるす。

「ボリシェヴィキーは、地獄よりもひどい暮らしをつくりだした。もしいつか本当の地獄を書くとすれば、私は、地獄についての心やさしい先入観を捨てて、レーニンの帝国をお手本にするだろう。」¹⁾

ロシヤを沈んでいく船にたとえて、『救助を求む』という本を残し、亡命地フィンランドで死んだレオニード・アンドレーエフは、スターリン権力にとって、極めてたちの悪い「白色亡命者」であった。親の政治的因果が子におよぶスターリン体制下では、『夜の放浪者たち』以前に、ダニール・アンドレーエフは、監視されていた。

アンドレーエフ夫妻は、「人民の敵」としてともに囚人になった。夫は、ヴラジーミル監獄へ、妻は、モルドヴァの収容所へ送られる。ヴラジーミル監獄は、モスクワから250キロ離れたヴラジーミル市にある帝政時代からの古い監獄である。この頃には、日本とドイツの高級軍人が戦犯としてこの監獄に入れられていた。ハンガリーの最高指導者になるヤノシ・カダルもここでの囚人であった。この時期はヴラジーミル監獄の生活条件は、比較的良かったと言われている。長時間の重労働がまっている収容所ではなく、監獄に入れられたおかげで、アンドレーエフは、生きのびただけでなく、思索と瞑想にふけることができた。

アンドレーエフが入っている雑居房に著名な生物学者ヴァシーリイ・パーリンがいた。彼は、1946年9月アメリカへ出張し、翌年の2月7日モスクワに帰ってきた。10日後クレムリンで開らかれた会議の席上でスターリンは、「私はパーリンを信用しない」と言った。前後関係は不明だが、いかなる理由であれ、スターリンの一言は判決である。その晩、パーリンは、妻にスターリンの言葉を伝え、自分は逮捕されるだろうと語った。翌朝パーリンは逮捕された。

パーリンは、25年の懲役に服することになる。スターリン時代には外国行きは、特権中の特権であった。しかし、出張命令を出したのがスターリン本人であれ、一たん外国に滞在した者は、監視の対象になるだけでなく、とっぴょうしもないスパイ事件をでっちあげられる命がけの危険にさらされることが多い。

パーリンとアンドレーエフは獄中で友人になった。一流の学者であるパーリンにとっても、アンドレーエフの執筆ぶりは刺激的である。アンドレーエフにとって、生きるとは、「創作的燃焼」のことである。

「いかなる外的な障害があろうとも、彼は、毎日はっきりした筆跡で、苦労して手にいれた紙切れを魅惑的な言葉で満たした。何回この紙切れが毎度『ガサが入る』（この犯罪者用語をかんべんして下さい）たびに取りあげられたことか、何回ダニール・レオニードヴィチがその全部をあらたに記憶で復元したことか。」²⁾

このようにして書かれたものをアンドレーエフは、パーリンに朗読する。超歴史などという概念が登場するアンドレーエフの神秘主義的な宇宙論、歴史観を、自然科学者で唯物論者であるパーリ

ンは認めない。しかし、アンドレーエフが、たぐいまれな独自の世界観をもった眞の詩人だと、論敵ペーリンは心の底から思った。

獄中で執筆し続けるアンドレーエフの姿は、他の囚人たちにも感銘を与えた。捜索の時には、その内容を理解できない戦犯や刑事犯たちまでが原稿を隠す手伝いをしてくれた。

1954年、アンドレーエフは心筋梗塞をおこした。これが彼の寿命を縮めることになる。しかし、肉体的には衰弱にむかっていながら、獄中生活は、ほかならぬアンドレーエフにとって、執筆のための好条件にめぐまれていた。

「自分自身にあるいは他人に嘘をつくはめになるような生存形態など、私には、全く受け入れることはできません。この一事だけからも、私が今いる所に、もし私の一存で決まるものなら、もう何年かはとどまる方がましたという気持になるのです。ここでは、言葉でも行動でも全く嘘なしでいられます。ここでは、私は自分を軽蔑しないですみます。ここで私は、部分的であるとはいえ、人生の目的を実現していくことができるのです。」³⁾

世にもまれな献身的な妻、自分の天職を真に理解してくれる者にあてて、アンドレーエフは、獄中からこのように書いた。すぐにお前のところへ飛んでいきたいと書く代りに、必要な期間ここ牢獄にとどまりたいと願う夫を、妻は、おそらく理解しただろう。1955年、スターリンはすでに2年前に死に、政治警察の最高責任者ベーリヤ内相は死刑になり、婆婆の空気は少し変った。しかし、それは、ソヴェト体制を人類史の一つの汚点のように見なしているアンドレーエフに、思考と表現の自由を与えるものではない。彼のような生き方を選んだ者には、「人民の敵」の隔離所こそが、邪魔の入りにくい仕事場であった。そこでは自分が自分を邪魔することがない。社会生活の自由が剝奪されているからこそ、ソヴェト体制下で生きていくために必要となる嘘や方便や妥協や服従や密告等々からの自由を手にすることができる。

2. 「情緒不安定」

1956年「スターリン批判」が政策として行なわれ、「人民の敵」の罪状調査が始まり、「犯罪構成要件無し」と認められ囚人の大群が家に帰り始めた。アンドレーエフの妻アーラも釈放されて、1956年8月15日モスクワにもどった。10日後、8月25日アーラは、ヴラジーミル監獄で夫と面会する。

「私たちは、ちっぽけな部屋で会った。彼は、すでに私を待っていた、早く連れてこられたのである。ひどく痩せていて、白髪で、囚人にはそうすることになっているのに丸ぼうずではなかった。喜こびは言うまでもない——彼は、私を両手で持ち上げた。

女の看守は、心底しんみりして私たちを眺めていたが、私たちが向きあっている小さな机

の下で、ダニールが詩の書かれている4つ折り版のノートを私に手渡したのに彼女は気づかなかった。私は、それを服の中へ隠した。」⁴⁾

スターリン体制がつくりだした架空の罪状を再検討する委員会は、“スターリン暗殺未遂犯”ダニール・アンドレーエフを無罪にしなかった。25年の刑を10年に減刑しただけである。スターリン暗殺計画がなかったことはもはや明らかだから、これは奇妙な決定である。

フルシチョフ政権による「スターリン批判」は、スターリン時代の大量殺人をともなった権力犯罪を、ソヴェト体制の本質とは無関係な異物から出たかのように見なした。スターリン時代への言及がソヴェト体制への批判へむかうことは、厳禁された。

アンドレーエフは、フルシチョフ時代がスターリン時代と本質的な次元では変っていないと考えていた。だからこそ彼は、自分の罪状を再検討してくれる委員会にあてて、およそ次のような大意の申し入れをおこなったのである。

「私は、誰れをも殺そうとしたことはない、この点に関して私の一件を再検討していただきたい。しかし、ソヴェトに良心の自由、言論の自由、公刊の自由が存在するようになるまでは、私を完全なソヴェト人だと見なさないでいただきたい。」⁵⁾

これは、スターリン以後のソヴェト体制にもこの3つの自由が無いことを明言したものであり、このため、アンドレーエフには、無実の罪でありながら無罪にしないという不条理な処置がなされたのである。“反ソ分子”としての自分に新しい罪が準備されていることが、アンドレーエフには分った。アーラは友人の助言により奇抜な手を使った。彼女は、夫の精神鑑定を正式に要求したのである。

アンドレーエフは、セルプスキー精神医学研究所へつれていかれた。そこで情緒不安定という診断が下される。うまくいった。健全なソヴェト市民にあるまじき、3つの自由の不在についての発言は、精神が一時的に病的な状態のときになされたものであると、原因をソヴェト体制ではなく病気のせいにすることが可能になったのである。アンドレーエフは、法的責任をまぬがれる。

1957年4月21日、壊れかけた心臓をもってダニール・アンドレーエフは、出獄した。1947年4月21日の逮捕の日からちょうど10年目である。

彼の人生の持ち時間は、あと2年たらずである。心臓は、活動の最終期に入っていた。死期が近づいていることを自覚しながら、彼は、自分の死ではなく、人類の滅亡について考えていた。2種類の滅亡——自殺的戦争による肉体的滅亡と全世界的絶対的専制による精神的滅亡——の危険にさらされる人類を救うためには、絶対的悪としての国家権力を地球上から追放しなければならないと彼は主張する。その下準備として、「国家の本質を改造する連盟」を創くり、苦痛と流血なしに、最終的には全世界的共同体へ人類を統合することを彼は提案する。この共同体の精神的指導部が世界

界のバラ〉である。これは、邪教を除く人類の諸宗教の統合体である。一つの宗教が一枚の花びらであり、諸宗教が和合して一輪のバラを形づくる。

このような目的をいだきつつ書きあげた『世界のバラ』は、一見、今まで何度も提案されてきた世界政府、宗教の共存・協同関係の確立等の古くて新しい考え方の一つにおもわれる。ところが、『世界のバラ』の著者は、このような主張をする者の誰れにも似ていないだろう。

『世界のバラ』は、奇書である。それは、特異な宇宙論にもとづいて展開された人類文化論であり、歴史哲学であり、人類の「統括的宗教」の立場から書かれた一種の『神曲』的な作品であり、スターリン体制下の生活者としての体験に裏うちされた人類救済案である。

『世界のバラ』は、ヴラジーミル監獄で1950年12月24日に書き始められ、1958年10月12日に完成した。

出獄後、定住する家がなく、アンドレーエフ夫妻は、住み家を転々と変え、町はずれに一部屋を獲得できたのは死の1カ月前だった。友人の援助で生きのびる貧乏生活だったが、人生最後の一年には、つつましい年金がもらえるようになった。しかし、貧しさよりも病いの方が深刻だった。1953年10月に釈放されていたバーリンのおかげで、まともな治療をうけることができたが、健康を回復することはできない。

「スターリン批判」の時期だったが、『夜の放浪者たち』の教訓から、アンドレーエフは、誰れをも再びまきぞえにしないために、『世界のバラ』の内容を極秘にした。『世界のバラ』は、スターリン時代が終りフルシチョフ時代になったからといって出版できる本ではない。世間は、パステルナークの『ドクトル・ジヴァゴ』でわきかえっていた。

出獄から死までの2年間で、アンドレーエフは、獄中から書き続けていた300頁におよぶ長編詩劇『鉄の神秘劇』と大部の『世界のバラ』を完成させ、詩を書き、あるいは、焼却処分された詩を記憶で復元し、数千頁分の原稿を未来に託し、死の床で密告者を許してから、「創作的燃焼」のあげく、1959年3月30日、52才で燃えつきた。

3. 「自分の運命の自由な囚人」

人類のさまざまな文化の底に流れている共通項の発見と確認が、人類統合案のための思想的下準備になる。自分の属する文化、宗教を世界の中心におき、その高みから異文化を値ぶみするような立場——きわめて多くの人間が落ち込んでいる井戸の底——から世界や宇宙を見ることに、アンドレーエフは、強く反対する。彼は、一見あいいれないような文化的現象の間に共通の「種子」を見いだし、見せかけの対極性や対立性をその「種子」の確認によって相対化し、あるいは、消していく。

それぞれの文化の核となる諸宗教間には、対立、敵対、排他の関係が一般的に見られる。

「さまざまな宗教の宗旨を調整しようとするさいに、何よりもまず、二次的なものから主要なものを、個別的なものから一般的なものをふるい分けることに習熟しなければならない、これが問題だ。どの宗旨も持っている『共通のもの』、主要なものは、長い長い間にわたって極度の不变性を保ってきた、思想の種子のなかにある。さまざまな文化的環境の土壤に落されると、この種子は、さまざまな芽——その宗旨のさまざまな変種——をだす。そもそも歴史のなかに目的論的な方向性があるとすれば、この方向性は、もちろん、なによりもまず、そのような不变の精神的種子が生き続けていることにある、つまり、何百万という意識によって信奉され、広く普及している思想の基礎のなかにある。」⁷⁾

アンドレーエフは、共通項としての「種子」とそこからでたさまざまな芽の好例として、輪廻転生をあげる。人間が死後に転生するという考えは、すでに今から2500年以上前、ウパニシャッドのなかにみられる。古代エジプトにもある。ほぼ全人類が天国と地獄を想定してきたから、死後の生まれ変わり、転生は、普遍的な考え方だといえる。ここに「種子」がある。ヒンドゥー教や仏教だけでなく、後に生まれるキリスト教もイスラム教もこの「種子」とつながっている。

ヨーロッパ文化の基盤の一つである古代ギリシャ文化のなかにも、転生の思想があった。その時代を代表する数学者、学者であったピュタゴラスは、転生を信じている。彼は、中年になってから、教団をつくり、教徒に肉食を禁じた。食べようとする動物が前世で人間であった可能性があるので、殺すことでも食べることもはばかったのである。ピュタゴラス教徒だけでなく、プラトンもオルペウス教徒も転生を信じていた。

死後に天国か地獄に行く、つまり、人間は一回だけ転生するという立場にたつキリスト教、イスラム教と、くりかえして転生すると説くヒンドゥー教、仏教とのちがいは、二次的なものにすぎない。仏教は、転生を六道輪廻として定式化した。天、阿修羅、人、畜生、餓鬼、地獄の六道を、解脱者以外は、転生し続けるという仏教の来世観を、キリスト教やイスラム教は排斥する。この絶対的拒否が、根底にある共通の土台を見うしなわせるのである。

共通項以外のもの、「転生者の靈的・物質的性質と構造、転生が業の法則に依存している度合い、転生の原則が動物界にもおよぶのかおよばないのか」⁸⁾、これら全ては、アンドレーエフによれば、共通の転生思想の変種にかかる二次的な問題にすぎない。これら二次的なものの内容そのものではなく、自分たちの教説を全人類が信奉しなければならない普遍的な価値をもち、それなしには救われないと絶対化することに誤りがある。この絶対化の立場こそ「世界のバラ」の精神の敵なのである。

アンドレーエフは、転生の思想のなかには、キリスト教、イスラム教にとって原則的に受け入れられないものなど全く無いと言いかける。彼自身は転生のくりかえしを信じる。したがって、仏教の六道輪廻とは別種の輪廻を信じていることになる。

アンドレーエフは、ギリシャ正教の文化のなかで育ったキリスト者である。彼は、キリストの再

臨による人類救済の神話を信じる。しかし、彼のなかには、キリスト教神学が決して認めない異教の思想とキリスト教的なものとが、調和をたもしながら合一している。教会からみても、思想から判断しても、彼をキリスト教信者ということはできない。キリスト教の異端という言葉すらあてはまらない。そこにあるのは、諸文化の核としての諸宗教の共通点を確認し合い、理解し合って「世界のバラ」を創ろうと願う求道者の立場である。彼は、すでに、地球上でただ一人の「世界のバラ」教徒なのである。

『世界のバラ』には、『神曲』に似た面がある。しかし、カトリック神学の立場で宇宙と世界を構成したダンテの作品では、キリスト教の外には救いはなく、キリスト教徒以外の人間は天国に入る資格をもたない。異教徒は、善人であれ偉人であれ、いわば準人間にすぎない。

『神曲』では、古代ローマの大詩人ヴェルギリウスがダンテを煉獄と地獄に案内する。ヴェルギリウスは、キリスト教成立以前の古代人だから、非キリスト教徒であり、ダンテが尊敬する詩人だが、その居場所は地獄の第一圈である。そこは辺獄とよばれる地獄のなかの最良の場だが、しかし、地獄である。洗礼を受けていないヴェルギリウスは、天国に入ることはできないから、その手前でダンテと別れる。『世界のバラ』ではこのようなことはおこらない。アンドレーエフにとって、キリスト教の絶対化も誤りであり、悪だからである。

ギリシャ正教のなかに育ちながらアンドレーエフは、東洋の輪廻転生の思想を独自にとりいれるだけでなく、自分自身を転生者だと自覚している。

「私の最後の死は、約300年前、われわれのとは異なる、非常に古い強力な超文化の中心となる国で起った。現世の全生活を通じて、はや子供の時分から、私は、この古い母国への郷愁にならざれた。この郷愁が身を焦がすようで、しかも、深いのは、私がその国で人生を1回ではなく、2回にわたって、しかも非常に充実した人生をおくったからかもしれない。」⁹⁾

母国とはインドである。アンドレーエフは、1906年11月2日ベルリンで生まれ、母親が産褥熱で亡くなつたので、生まれたばかりでモスクワの母方の伯母の所にひきとられた。これが現世での彼の誕生である。

アンドレーエフは、転生の歴史が記録されている「深層記憶」をたどっていく。300年前、インドで死んだあと、彼は、死後の世界を遍歴する。生前、自分のカーストから追放され、40年間も不可触賤民のあいだで暮らしたので、このことによって業のむくいから開放された。業のつぐないをするために、あるいは、業ゆえの責苦が待っている「報復界」へ落ちることをまぬかれ、「光明界」の第一圈オリルナへ入れた。ここで、彼より数年おくれて地上の死をむかえた妻とも再開する。オリルナで「新しい感覚器官」が開花した。地球的現実のなかでは一にぎりの最高の賢人だけにそなわっている靈的視力、靈的聴力、深層記憶が、ここオリルナでは、皆にそなわっている。このおか

げで、他の圈や地上のことも分かる。

オリルナから次のより高い圈への移行は、死によってではなく変身によって行なわれる。変身すると同時にファイルとよばれる次の圈への移行が完了する。ファイルは、輪廻的な進路における別れ道である。もし、ある特定の使命を託されれば、ここから地上へ再生することができる。彼は、次の圈ネルチスへ向う。ここでも身体は変化していく。肉体は、非地上的な永遠の若さで輝く。こめかみには花のようなものが光っている。これは靈的聽力の器官である。ひたいには宝石のようなものがついている。これは靈的視力の器官である。深層記憶の器官は脳の中にできている。

次の圈はゴチムナとよばれる。これは「光明界」の最終圈である。「光明界」を遍歴している靈的人間のこれから先の運命が決められるので、またの名を「至高の運命の園」という。ここは運命の別れ道である。ここから転生の終着点である「天上のインド」へ昇っていくことも、特別の使命をおびて地上的現実へ下っていくこともできる。靈的人間アンドレーエフは、後者の運命を選んだ。しかも、彼は、自分の出身地インドではなく、ロシヤという未知の、異文化の国を選んだのである。

彼は、「天上のインド」という天国への上昇を中断し、とてつもない使命をおわされ、「自分の運命の自由な囚人」¹⁰⁾としてロシヤへ下りていく。

4. 「使 命」

『神曲』では、ダンテが地獄・煉獄・天国のどこへ行こうが、体に変化があらわれるようなことはない。『世界のバラ』では、インドの賤民であった者が、死後に「光明界」で非地上的、超人的感知能力を身につけ、そのための器官が体にあらわれる。その能力とは、自分が属している次元や場の外で起こっていること、および、それが人類の歴史の流れに与えている根源的な影響力とを把握する力である。

アンドレーエフによれば、われわれの歴史は、地上的次元で自己完結するのではなく、異界で起こっていることの地上版にすぎない。

したがって、人類史上の出来事、人間の営みの全ては、その一部を彼が転生者としてかいま見た超物理的宇宙の法則性に照らして考察される。歴史が超歴史の一環としてあつかわれる。

文化も超文化帯といふ体系のなかでとらえられる。どの超文化帯も、①地球的現実における文化のない手である民族が住む所、②この民族のうち、地上における死の後で「光明人間」になった者が住む天上の国、③悪魔群の住む下部世界を持つ。超文化帯は、多くの層から成っており、「光明界」の各圈が上に向かって、「報復界」の各圈が下に向かってそれぞれ階段状につらなっている。

インド文化やロシヤ文化の理解には、それぞれインド超文化帯、ロシヤ超文化帯の全体的把握が必要であり、この世と異界群とを「見事な全一性、神の首飾り」¹¹⁾として、統一的にとらえる必要性をアンドレーエフは強調する。このためには、「異界浸透的世界把握」¹²⁾が必要になる。靈的視力、靈的聽力、深層記憶の器官は、地球上のふつうの人間にはそなわっていないが、アンドレー

エフは、超文化帶および超歴史的過程の展開の場をうかがうことができる、狭い透き間の存在に気づく能力をさしきられた極く少数者がいると信じる。

転生の記憶をもつアンドレーエフ自身が、その透き間を手がかりにして、最終的には、超物理的宇宙の全体像を“視た”のである。密教ではマンダラの観想が行なわれる。修行者は、心の中でマンダラにえがかれた宇宙図を再現していく。アンドレーエフは、すでに図示された構造図を心の中でたどるのではなく、マンダラの絵図なしに、宇宙のマンダラを、いわば、創造的に見るのである。

地球的現実とは異次元で進行し、人類の歴史に作用する過程を、アンドレーエフは、超歴史とよぶ。超歴史の認識を、彼は、3段階にわたって行なう。

第1段階は、「超歴史的ひらめき」¹³⁾である。これは、大きな歴史的現象の本質を電光石火的に体得することである。歴史的時代のつらなりが、そして、「それらの時代の超歴史的宇宙」が、一挙につかみとられる。アンドレーエフは、この体験者を、暗い静かな部屋に長いあいだ居たあと、嵐の吹きすさぶ戸外へ引き出された者にたとえる。これは、いわば、超歴史の場との交感による精神的、知的激動であり、未知の認識対象との出会いであり、異次元の領域との接触である。この体験は、それ以後ながい間にわたって体験者の精神を養う。

第2段階は、「超歴史的瞑想」¹⁴⁾である。第1段階は受動的であったが、第2段階では意志の力が働く。これは、歴史的形象を、その背後にある第2の現実——超歴史的現実——と融合させてとらえ、それについて深く瞑想し、洞察することである。これらの形象は、芸術作品の形象に転化しうる。

第3段階は、「超歴史的意味づけ」¹⁵⁾である。これは、諸形象の相互関係を解明し、同時に、認識の空白部分を埋める仕事である。ここでは理性が中心的な役割を演じる。

『世界のバラ』は、アンドレーエフ自身の「超歴史的認識」の賜物である。1921年8月、14才の時に彼は、第1回目の「超歴史的認識」を体験した。それ以後、1928年、1931年、1932年、1933年、1943年と、内容・性格・成果にちがいはあるが、同種の体験をした。大切なことは、1949年から1953年の間に、監獄の中で何回も体験したことである。しかも、今までの積み重ねの結果、獄中では、“見る”対象がより具体的になり、歴史的形象は、いわば、異界から生身の人間として姿をあらわし、囚人アンドレーエフは、それと“対面する”。

ロシヤ超文化帶の「光明界」の最高点に「天上のロシヤ」、別名「聖なるロシヤ」がある。そこにザトーミスとよばれる所があり、ドストエフスキイ、トルストイなど地上のロシヤ文化の最高峰にいた者が住んでいる。アンドレーエフは、獄中で彼らと“会う”能力を得た。

「出会いは、人の多い獄中で昼間でもおこなわれることがあったので、私は、全身をつかむ幸せからくる涙のほとばしりを隠すために、壁に顔をむけて、寝床によこたわらなければならなかった。」¹⁶⁾

娑婆では、コスモポリト批判という名のもとにユダヤ人弾圧がおこなわれ、芸術と学問の全分野で統制、弾圧が国家的運動として進められ、かって囚人であった者が再逮捕されて収容所で働くされ、架空の犯罪をでっちあげることによってヴォズネセンスキイ副首相以下多数を殺したレニングラード事件があり、スターリンを始め最高権力者たちの毒殺を企てたとしてクレムリンおかげの医師たちが逮捕された医師団事件等が連鎖状に起こっている。

獄中にいるアンドレーエフは、それらにまきこまれることはない。最高刑だから、これ以上刑期をふやされる心配もない。彼は、自由剝奪の刑に服しながら、“自由”である。独自の認識活動にたずさわることによって、彼は、一種の時代超越的な自由を楽しむ。それは逃避的安心ではなくて、スターリン体制下の現実とは異なる次元へ自分を没入させる認識活動がもたらす境地である。だから彼は投獄されたことに感謝する。

「経験したほとんどすべての人に呪われ、私にとってもそう楽だったわけではないが、しかしそれとともに、私の靈的器官を少し開くための強力な手段になった状況へ、丸10年間も私をおいてくれたので、私は、運命の前に感謝の念をもってひれ伏さないでおられようか。外部の世界から隔離され、無制限のひまにめぐまれて、眠っている同囚のあいだで目をさましたまま、寝床によこたわりながら1500夜をすごした牢獄のなかで、ほかならぬ牢獄のなかで、私にとって超歴史的、超物理的認識の新段階が始まったのである。超歴史的ひらめきの訪れがひんぱんになった。くる夜もくる夜も、とめどもない瞑想と意味づけにふけった。私の個人的生活の出来事も歴史と現代の出来事をも新しい意味づけによって照らしだしながら鮮明度をましていく形象を、深層記憶が意識のなかへ送りこみ始めた。そして、最後に、短いが深い眠りから朝方めざめると、私は、今日の眠りが夢とは全く別物——超物理的遍歴——に満ちていたことを知るのであった。」¹⁷⁾

アンドレーエフの「超歴史的認識」は、西洋でも東洋でもさまざまな宗教家、哲学者、詩人、芸術家たちによって試みられてきた、深層意識の開発による超日常的次元への入場である。ここでは、日常茶飯事に使われる意識は、事実の根源、宇宙の深層を見とどける途上の邪魔物として、退けられる。日常の意識は幕である。これを上げれば、深層という舞台があらわれる。ふつうの常識人の知的生活は、幕のこちら側でおこなわれるが、幕をあげて異次元へ入場するために、瞑想、静坐、坐禅等さまざまな方法が試みられた。アンドレーエフは、その一群の一人である。ただアンドレーエフは、深山幽谷でもなく荒野でもなく僧院でもなく、獄中で「超物理的遍歴」を行なったのである。

アンドレーエフは、「異界から流れる至高の真理と光」¹⁸⁾とを人に悟らせるのが、芸術の最も重要な仕事だと考える。芸術を通じてこれを行う能力のある人を、彼は、「伝達者」とよぶ。「伝達者」は、天才的な芸術家であることが多い。しかし、すべての天才に「靈的器官」がめざめると

はかぎらないから、天才的芸術家でありながら、「伝達者」になれない者もいる。

「伝達者」は、光明を、神的原理を伝えるとはかぎらない。悪魔的原理を伝える「闇の伝達者」もいる。「闇の伝達者」は、芸術より哲学や科学に多い。アンドレーエフはペーコン、コント、スチルナー、ニーチェ、マルクス、チミリヤーゼフ等を「闇の伝達者」とみなす¹⁹⁾。

芸術の分野では、「闇の伝達者」の代表としてスクリヤービン（1872-1915）があげられる。銀の時代の多彩な芸術家群像のなかで、ひときわ強い光を放って消えたスクリヤービンは、宇宙を自分の意識のなかへ呑み込むような、自己の至上化の哲学にうらうちされた特異な作品を残している。神智学に接し、インド哲学に傾き、音楽を魔の力と考えていたこの作曲家は、『神聖な詩』、『法悦の詩』、『悪魔の詩』、『プロメテウス』を創り、この世の週末にあわせて『神秘劇』^{ミステリー}を完成させる予定であったが、伝染病を媒介するハエに上唇を刺され、あるいは、上唇の出来物から敗血症になって急死した。

魔性的なものを秘めたスクリヤービンの世界にアンドレーエフは、自分が“視た”超物理的宇宙のなかの魔界とのつながりを発見する。

「彼は、神を信仰した、自分流に神を愛した、自分自身を神の伝達者で、しかも予言者とすら見なしていた、しかし、あきれるほどの軽々しさでり替えをやってのけ、自分自身の精神的無統制の犠牲となり、ドゥグール²⁰⁾の伝達者になりはてた。分かっている人はほとんどいないのだが、たとえば、神秘的な色欲がただよい、集団的な性の劇がおこなわれ、淫欲の衝動が宇宙的次元へ引き上げられているこの魔的闇が、『法悦の詩』には、すごくあからさまに描かれている、そして、大切なことだが、それを摘発する、警告する観点からではなく、理想として描かれているのである。『法悦の詩』の敏感な聴き手が、宇宙的ちぎりの音響的パノラマに、最初のうちは、当惑し、次には、魔法にかけられたようになり、とどのつまりには、あたかも内心がふぬけになって、ひどい虚脱状態におちいったような気分になるのは、あたりまえである。」²¹⁾

スクリヤービンへの断罪は、アンドレーエフが、自分の“視た”世界・宇宙の原理から地上の文化に下した価値判断の一例である。人類文化の高峯にあっても、「伝達」の内容が「反神」の支配領域とつながっていれば、その芸術は退治される。理念、思想としての「世界のバラ」は、一方では、諸文化の共通項としての「種子」をさぐりだして、文化の対立、相互排斥の根拠をうばいとり、他方では、未来の人類共同体の創設の邪魔になるものを排除していく。それは、特定の宗教、自国の文化の絶対的優位性を否定した開放的な体系でありながら、カルヴァン的偏狭さを秘めている。

かってインド人として地上の生を終えたアンドレーエフは、地上への転生の条件として「使命」を託された。それは、異次元の大きな流れを地上の人間に悟らせるだけでなく、その中に貫流している神的原理が地上で勝利するように導くことである。ここから、「闇の伝達者」と戦う義務が出

てくる。転生者アンドレーエフは、地上に生きている間に、必要なことを人類に「伝達」するため『世界のバラ』という書物を書き残す義務をおったのである。疲れきった旅人が折れそうな杖にすがって歩くように、アンドレーエフは、壊れかけた心臓で体を支えつつ『世界のバラ』を書きあげ、その理念の詩的表現でもある詩群を残した。

アンドレーエフは、自分が構築した宇宙へ自分自身を送りこみ、そこで自分に「使命」を与えた。彼は、天に代って自分に天職をさしきた。そのことによってスターリン時代の牢獄は、仕事部屋に変わる。彼の前では、検閲制度は空転する。独自の輪廻転生説を持つことによって、彼は、この世を相対化し、未来とかかわる天職を絶対化した。

注

- 1) ЛГ-Досье. №. 8. 1994. с. 8.
- 2) Д. Л. Андреев. В. В. Парин. Л. Л. Раков. Новейший Плутарх. “Московский рабочий”. Москва. 1991. с. 301.
- 3) Даниил Андреев. Русские Боги. Стихотворения и поэмы. “Современник”. Москва. 1989. с. 359.
- 4) Даниил Андреев. Собрание сочинений в трех томах. т.1. “Московский рабочий” и “Фирма Алеся”. Москва. 1993. с. 21.
- 5) Там же.
- 6) Г. Померанц. Подступы к “Розе мира”. Искусство кино. №. 5. 1990. с. 123.
- 7) Даниил Андреев. Роза мира. “Иной Мир”. Москва. 1992. с. 41.
以下の引用にあたっては本書を PM と略す。
- 8) PM. с. 41.
- 9) PM. с. 104.
- 10) Даниил Андреев. т. 1. с. 111.
- 11) PM. с. 71.
- 12) PM. с. 72.
- 13) PM. с. 55.
- 14) PM. с. 56.
- 15) PM. с. 57.
- 16) PM. с. 62.
- 17) PM. с. 61.
- 18) PM. с. 350.
- 19) PM. с. 356.
- 20) アンドレーエフの説明によれば、ドゥグールという魔的圈にいる“者”は、人類の淫欲の放射を受けることによって生命力を保つ。
- 21) PM. с. 356.

12才のときスクリャービンと出会ったバステルナークは、彼の悪魔的な魅力にとりつかれ、自分も作曲家になろうとした。彼は、6年間まじめに音楽の勉強をした。その人柄も知っているスクリャービンの作品について、バステルナークは、「作品の悲劇的な力は、全ての老大家的なもの、全ての虚偽おどしのものへ厳かにアカンペーをしたのであり、それは、狂気じみたほど、子供じみたほど大胆で、墮ちた天使のように、天然のままであり、自由である」（Люди и положения）と書いている。

「墮ちた天使」つまり、悪魔のようにという表現は、アンドレーエフの文脈の上から興味ぶかい。「ト

ルストイを攻撃し、超人を、背徳を、ニーチェ主義を説いた」(同上)スクリヤービンは、まさにアンドレーエフのいう「闇の伝達者」の特徴をそなえていることになる。

付 記

ダニール・アンドレーエフは、ソヴェト体制のなかでは絶対に公刊が不可能なものを、自由に書いた。しかし、彼の天職とは関係のない、生計のための一時的な副業として行ったものが、一点だけ活字になっている。

アンドレーエフ夫妻の窮状をみかねた地理学者セルゲイ・マトヴェーエフは、啓蒙書の共同執筆を提案した。それは、『中央アジア山岳地帯のすばらしい研究者たち』という題で公刊された。

Д. Л. Андреев. С. Н. Матвеев. Замечательные исследователи горной Средней Азии. ОГИЗ. Москва. 1946.

これは、中央アジアの地図の空白地帯を、地理学、地質学、鉱山学、植物学、昆虫学、鳥類学等の立場から調査、研究したビョートル・セミヨーノフ・チャンニーシャンスキイ (1827-1914), ニコライ・セーヴェルツォフ (1827-1885), アレクセイ・フェードチェンコ (1844-1873), イヴァン・ムシケートフ (1850-1902) についての伝記である。全部で96頁の小さな本で、発行部数は50000である。

共著者セルゲイ・マトヴェーエフは、『夜の放浪者』事件にまきこまれ、収容所で病死した。

この本は、『ロシヤの旅行家』というシリーズの一冊で、アンドレーエフは、その姉妹篇として、アフリカを探検したロシヤ人たちについての本を書きあげた時に、その本の内容について講演してほしい、とおびきだされ、逮捕された。

(1995. 5. 9 受理)